

保育者養成における英語教育のあり方に関する一考察

— ESP に完全特化した授業を目指して —

English Courses for Students Majoring in Early Childhood Education :
With a View to Establishing a Completely ESP-oriented Course

麻生 雅樹[※] 石橋 香奈^{※※}
Masaki Aso[※] Kana Ishibashi^{※※}

Abstract

The purpose of this thesis is to examine and analyze the result of a survey by questionnaire that evaluates the English course based on both the EGP (English for General Purpose) and the ESP (English for Specific Purposes) approaches we provided for students majoring in early childhood education in the 2017 academic year, with the aim of finding out the ideal course design best suited for them, many of whom do not feel confident in communicating in English.

The result shows that the best possible English course for the students would be a completely ESP-oriented one that is elaborately implemented with authentic and practical English activities given in nursery schools and/or kindergartens, which is expected to fulfill student's needs for both highly motivational materials and significant learning effects.

We conclude that we should put more stress on the ESP approach for our English course in the early childhood teacher training program and try to find a way to accomplish a pure ESP course that enables us to enhance students' motivation for learning English and develop their proficiency in English without the makeshift EGP + ESP hybrid, which we think trains future teachers in early childhood education so that they will be able to make the most of their extensive knowledge of English education for children in their career as a teacher in early childhood education or even in higher education.

Keywords : early childhood teacher training, English education, ESP approach

1. はじめに

急速なグローバル化に伴って、わが国における英語教育改革の一環である小学校での児童英語、さらには幼児英語といった早期英語教育の重要性がますます高まっているという認識は決して新しいものではない。もちろん早期英語教育の是非をめぐるは依然として賛否両論はあるものの、本学が所在する福岡県を対象とした宇賀田（2005）の調査でも明らかなように、保育現場や保護者のニーズが先行する形で、都市圏を中心に地方にも早期英語教育の取り組みは広がりを見せている。

現在の我が国の英語教育全般において、とりわけ、オーラル・コミュニケーションを主とした実践的な英語運用能力の向上が求められているのであれば、長期的に見た早期英語教育の役割は、ビジネスをはじめとするグローバルな場面を想定した国際競争力の強化や国際交流・貢献を視野に入れなが

※日本経済大学経営学部経営学科 ※※福岡こども短期大学こども教育学科

ら、その基礎を築くようなものでなければならず、早期英語教育の現場を担う保育者の重要性も自ずと明らかとなるであろう。

また、日本国内におけるグローバル化の状況にも目を向けると、英語運用能力の高い保育者の重要性が改めて認識できるだろう。法務省（2017）のデータによると、2017年6月末時点における在留外国人の数は2,471,458人であり、2012年12月末の在留外国人2,033,656人と比較すると、この約5年間で437,802人増加していることになる。そのうち、5歳以下の外国人は100,790人となっている。

さらに、福岡県の在留外国人5歳以下の人数に限ってみると以下の通りである。

表1

0歳		1歳		2歳		3歳		4歳		5歳	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
226	207	204	207	224	189	199	168	212	186	172	151

これらの統計は、日本における急速なグローバル化を裏づけるとともに、外国人幼児に対する保育・幼児教育分野における早急な対応が必要であることを示唆するものである。また、福岡県の現状も踏まえた上で、保育現場で英語を使いこなし、教えることができる知識と能力を十分に備えた保育者を養成することが急務であると考えられる。

これまでの早期英語教育は主に日本人の子どもを対象としたものであったが、このようなグローバル化による外国人の保育施設の利用の増加を想定すると、早期英語教育全般に精通するのみならず、高い英語コミュニケーション能力を持った保育者と教員の養成が急務であり、これまで以上に重要な課題となっていると思われる。以上のような状況を考慮しつつ、筆者たちもまた、時代の要請に即した大学の保育科における保育者養成のための英語教育のあり方を模索するものである。

保育者養成校あるいは大学の保育科の英語教育に関連したこれまでの議論では、目的（ここでは保育）に特化した英語能力を開発する教育である ESP（English for Specific Purposes）が大きな流れを形成していると思われる。ESP は一般的な英語能力を開発する教育である EGP（English for General Purposes）に対立するものであるが、望月（2016）は、ドルニエイらの動機づけ理論から説き起こし、ウッドワソンの ESP 理論を経て、日本の大学における ESP の歴史的経緯を説明した上で、自らの保育教育学科の授業における ESP の取り組みとその成果を報告している。つまり、保育現場で使える専門分野の英語学習を授業の中心に据えることによって、保育者を目指す学生の動機づけを維持しながら、英語学習が有意義なものとなるような試みである。まさに、上述のような「時代の要請に即した大学の保育科における保育者養成のための英語教育のあり方」の一つを示すものであろう。

また、加茂（2013）は、深山らの研究（2000）をはじめ、大須賀（2006）や松崎（2008）などの先行研究を援用しながら、保育学科の英語授業に ESP アプローチを取り入れる可能性を探るべく、保育専攻の学生に対して ESP の取り組みに関するニーズ調査・分析を行っている。そして、伝統的な授業形態を望みつつ、「大学でコミュニカティブかつプラクティカルな英語を身につけたい」（加茂 2013：91）という学生の矛盾したニーズを浮き彫りにし、「『伝統的』授業を脱して、コミュニケーションに重きを置いた活動を行うことで、学生の求める能力を身につけさせる必要がある」（加茂

2013：91)と結論づけている。その上で、インタラクティブな活動を通して「英語を実際に使うことの喜びや楽しさに気づいて欲しい」(加茂2013：91)と述べ、学生の動機づけに対する効果にも言及しながら、ESPアプローチを授業に導入する際の総合的な方向性を示唆している。

さらに、小玉(2014)は、「幼児・児童対象の英語教育に関する教材研究や指導法の習得」(小玉2014：187)を目的とした自らの授業「キッズ・イングリッシュ」で実践的な保育現場の英語活動を導入しているが、それは「受講生の英語力および様々なレベルでのコミュニケーション能力を向上させること」(小玉2014：187)も目的の一つであるとしている。そして、「キッズ・イングリッシュ」におけるより実践的な英語活動を通して、学生たちが実際に「様々な気づきを経験し、英語だけでなくコミュニケーションという点でも、多くのことを学んできた」(小玉2014：192)と述べ、早期英語教育における保育現場の英語活動そのものが保育専攻の大学生にとって大きなメリットがあることを実証している。

その一方で、田辺(2012)は、森田(1995、1997)と大須賀(2006)の報告に関連して、ドルニェイの動機づけに関する「内発的動機」「外発的動機」の理論と関連づけながら、「歌を歌う、劇をする、ペアやグループで活動するなどの活動は、保育者を目指す学生に共通する嗜好や資質と合致する言語活動であり、内発的動機を高めるのに有効であったと考えられる」(田辺2012：108)と述べて、「ESPアプローチは外発的動機を高めるのに有効な教授法と捉えられるが、内発的動機も含めた観点で捉え、学習者に最も適した教授法や指導法を用いることが重要ではないだろうか」(田辺2012：108)とESPアプローチの有用性を主張しながらも、ESPをどのぐらいの割合で授業に導入するかという点においては慎重な姿勢を示している。その上で「保育科でのESPにおいては、完全な形態でのESPの実践よりもESPの視点を取り入れた準ESPのクラスの実践の方が実行可能であり、準ESPクラスではあっても高い効果が期待できるということが示唆される」(田辺2012：108)という立場から検証を行い、予想通りの結果を得ている。

ESPか準ESPかの議論は、上述の通り、田辺自身が「学習者に最も適した教授法や指導法を用いることが重要」というように、教育機関によって大きく異なる可能性がある。また、前出の望月(2016)は、性急な結論の危険性を認識した上で、「全体的な傾向として、保育・幼児教育の分野に特化したESP教育は短大に適していて、四年制大学保育系学部の場合には、EGPあるいはESPとEGPの折衷型の授業が好ましいと考えられる」(望月2016：92)と指摘している。総合して考えると、学生のニーズに合わせた形でESP教育を導入していくことが重要であるということは少なくとも言えそうである。

そこで本稿では、できるだけ保育者養成のニーズに合わせた英語の講義を提供し、グローバル化時代の早期英語教育と保育現場に対応できる保育者の育成に資するため、先行研究におけるこれまでの議論を踏まえながら、一般学生のための英語教材による授業の取り組みと比較しつつ、保育科独自の英語教育や保育の仕事に直接的に活かせる実践重視教育の模索を目的とした授業を実施し、その結果を分析・考察することで、保育科における英語の授業の内容と質を向上させるとともに、当該科目に対する学生の学習意欲と学習効果の向上も期待できる英語教育のあり方の方向性を提案することを目的としている。

2. 授業の実施内容と調査方法

平成29年度のF短期大学の英語科目「英語」の受講生（配当年次1年生）に対する講義実施実績を対象とする。講義に際し、諸般の事情から前任の教科書とシラバスを受け継ぎ、前期では主にシラバスに沿って授業を展開したが、後期では学生に周知し、了解を得た上で、保育現場の早期英語教育に活かせると思われる活動を積極的に取り入れた。上記の通り、講義を学生のニーズにより近づけ、保育現場における早期英語教育に役立つと考えられる実践的な方法を積極的に導入することで、保育科における英語の授業の内容と質を向上させるとともに、学生の英語科目に対する学習意欲と学習効果の向上も期待できるのではないかという仮説を立て、変更を加えてみようと考えたからである。

授業の実施内容は以下の通り。

活動内容：教科書（Side By Side 1）

絵本（Eric Carle の “The Tiny Seed” をはじめ、その他の絵本）

歌（We Sing など）

英語ゲーム（英単語ビンゴ、○×クイズ、伝言ゲームなど）

海外保育調べ

紙芝居制作

保育指導案+模擬保育（授業で作成した紙芝居をもとにして）

調査方法：5段階による選択回答方式と自由記述の形式で回答を求めるという2種類の質問事項からなるアンケート。

対象者：F短期大学の受講生272名（回収率約91%、うち有効回答218名）

実施日：2017.11.28～12.1

調査項目：下記の通り、質問A～質問Mまでの13問

5段階式

- 1 全くそう思わない
- 2 あまりそう思わない
- 3 どちらとも言えない
- 4 まあまあそう思う
- 5 とてもそう思う

A：英語は得意ですか？

B：今年度の前期から後期にかけて学習した教科書の内容に興味が持てましたか？

C：教科書による学習で英語力が伸びたと感じましたか？

D：教科書による学習でペアワークを楽しく行えましたか？

E：1年間を通して、最も楽しかった活動はなんですか？

F：1年間を通して、どの学習活動が最も英語学習にとってためになったと感じましたか？

G：教科書とそのほかの活動を比べて、英語学習レベルに違いを感じましたか？

H：1年間の授業を通して、英語に対する意識はどう変化しましたか？（自由記述）

I：保育現場で英語を使った活動を行いたいと思いますか？

J：子どもたちに英語は必要だと感じますか？

K：それはどうしてですか？（自由記述）

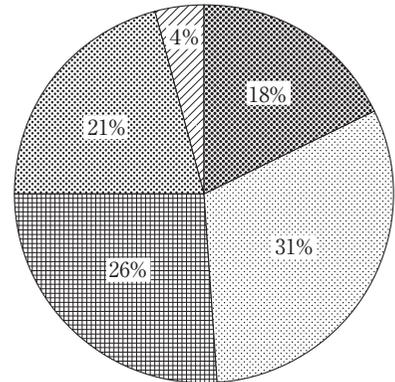
L：英語の授業で保育現場に生かせる活動がある方が良いと思いますか？

M：授業内でどのような活動をするともっと楽しく学ぶことができますか？
（自由記述）

3. 結 果

質問A 英語は得意ですか？

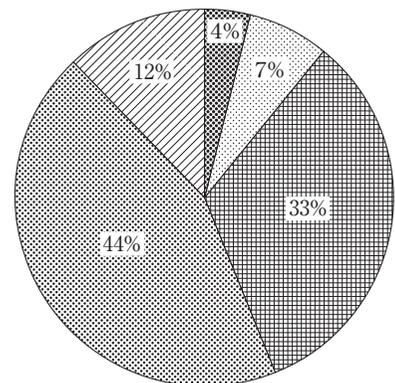
1 全くそう思わない	39名
2 あまりそう思わない	67名
3 どちらとも言えない	58名
4 まあまあそう思う	45名
5 とてもそう思う	9名



■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ▨ 5

質問B 今年度の前期から後期にかけて学習した教科書の内容に興味を持ってましたか？

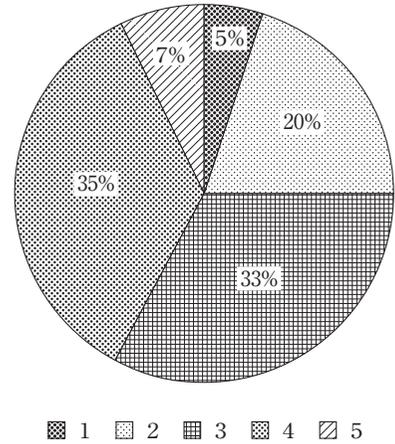
1 全くそう思わない	8名
2 あまりそう思わない	16名
3 どちらとも言えない	71名
4 まあまあそう思う	97名
5 とてもそう思う	26名



■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ▨ 5

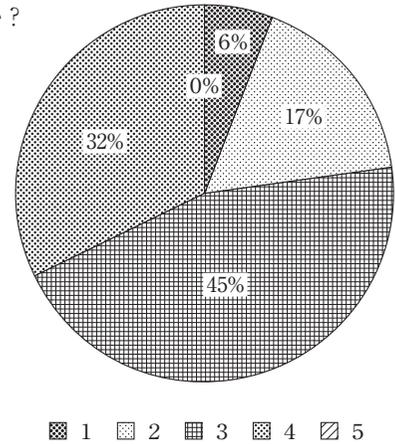
質問C 教科書による学習で英語力が伸びたと感じましたか？

- 1 全くそう思わない 11名
- 2 あまりそう思わない 44名
- 3 どちらとも言えない 72名
- 4 まあまあそう思う 75名
- 5 とてもそう思う 16名



質問D 教科書による学習でペアワークを楽しく行えましたか？

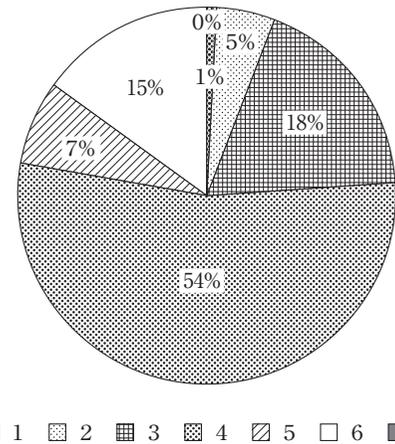
- 1 全くそう思わない 1名
- 2 あまりそう思わない 13名
- 3 どちらとも言えない 36名
- 4 まあまあそう思う 99名
- 5 とてもそう思う 69名



質問E 1年間を通して、最も楽しかった活動は何ですか？

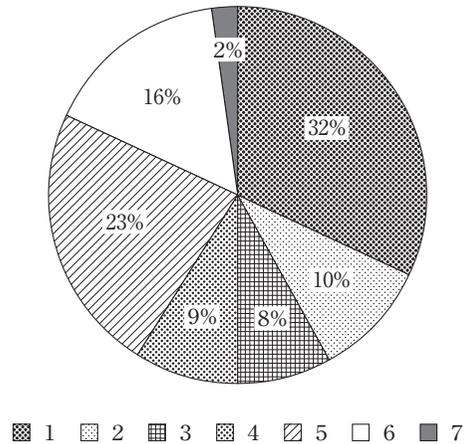
上の活動内容を参考にして、1つ選んでください。

- 1 教科書 3名
- 2 絵本 11名
- 3 歌 38名
- 4 英語ゲーム 118名
- 5 海外保育調べ 16名
- 6 紙芝居制作 32名
- 7 保育指導案 0名



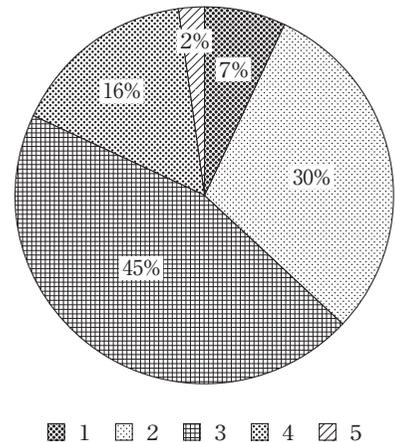
質問F 1年間を通して、どの学習活動が最も英語学習にとってためになったと感じましたか？
上の活動内容を参考にして、1つ選んでください。

- | | |
|----------|-----|
| 1 教科書 | 69名 |
| 2 絵本 | 23名 |
| 3 歌 | 18名 |
| 4 英語ゲーム | 19名 |
| 5 海外保育調べ | 50名 |
| 6 紙芝居制作 | 34名 |
| 7 保育指導案 | 5名 |



質問G 教科書とそのほかの活動を比べて、英語学習レベルの違いを感じましたか？

- | | |
|-------------|-----|
| 1 全くそう思わない | 16名 |
| 2 あまりそう思わない | 65名 |
| 3 どちらとも言えない | 99名 |
| 4 まあまあそう思う | 34名 |
| 5 とてもそう思う | 4名 |

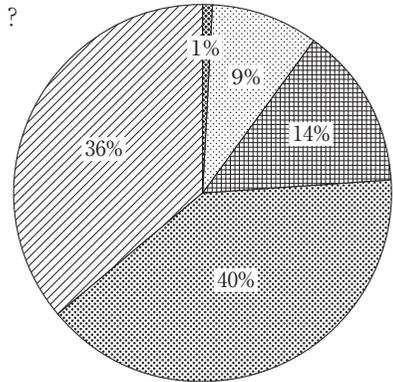


質問H 1年間の授業を通して、英語に対する意識はどう変化しましたか？

- 苦手分野だったが、遊びを取り入れながら行くと、とても楽しかった
- 保育現場でも、英語を使う活動が自分にもできるんだと知り、英語をもっと学びたいと感じた
- 子供と英語で関わるという考えがあまりなかったが、英語ゲームや紙芝居をする中で子どもたちと一緒に学びながら遊ぶことは思っていたよりも楽しいだろうと感じた
- 英語をいま学ぶのは子ども達のため
- 現場で英語を使いたい
- 高校の時の英語は文法ばかりで苦手だったが、この一年間の英語は歌や絵本もあり、とても楽しかった
- 授業を通し、英語を身近に感じられるようになった

質問 I 保育現場で英語を使った活動を行いたいと思いますか？

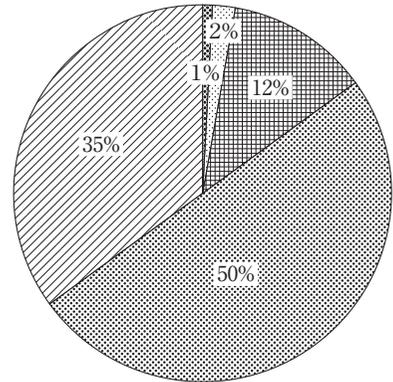
- 1 全くそう思わない 3名
- 2 あまりそう思わない 20名
- 3 どちらとも言えない 31名
- 4 まあまあそう思う 86名
- 5 とてもそう思う 78名



■ 1 □ 2 ▨ 3 ▩ 4 ▪ 5

質問 J 子ども達に英語は必要だと感じますか？

- 1 全くそう思わない 1名
- 2 あまりそう思わない 5名
- 3 どちらとも言えない 27名
- 4 まあまあそう思う 109名
- 5 とてもそう思う 76名



■ 1 □ 2 ▨ 3 ▩ 4 ▪ 5

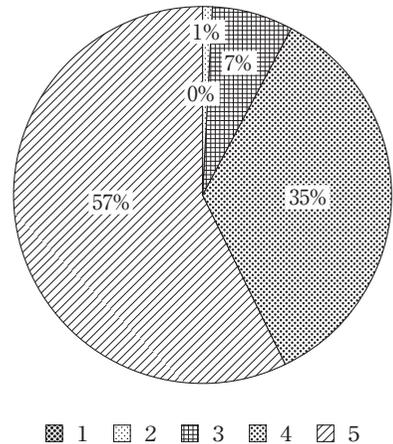
質問 K (質問 J 子どもたちに英語は必要だと感じますか？の回答に続けて)

それはどうしてですか？

- グローバル化しているから英語は必要
- 何にでも興味を示す子どもたちに楽しさをしてもらいたいから
- 生きていく上で必要
- 英語を使う場面は案外多い、知っていて損はない
- 他国との交流が増えるから
- これから英語を使う機会が増えていくから
- 早い段階で英語に触れておくと将来便利

質問L 英語の授業で保育現場に生かせる活動がある方が
良いと思いますか？

1 全くそう思わない	0名
2 あまりそう思わない	1名
3 どちらとも言えない	16名
4 まあまあそう思う	76名
5 とてもそう思う	125名



質問M 授業内でどのような活動をするのもっと楽しく学ぶことができますか？

- ゲームをもっとしたい
- 映画を見たい
- 会話の実践
- 英語の歌をもっとしりたい
- 実践で使える教材の制作
- 体を使った英語遊び
- 簡単な劇をするのも楽しそう

4. 考 察

まず、英語力に関する学生たちの自己評価を尋ねる質問Aでは、「まあまあそう思う」「とてもそう思う」を合計した回答の割合が25%であるのに対し、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した回答の割合が49%と大きく上回っている。この結果、受講生のなかには英語に苦手意識がある学生が多く存在し、基礎的な英語学習が継続的に必要であることが予想される。しかし、これまでの学習経験の上に立った回答であることを考慮すれば、授業の内容を反復的なりメディア学習で提供するよりは、授業提供の方法にも様々な工夫が必要であることが想像できる。

それに対し、質問Bでは「まあまあそう思う」「とてもそう思う」と回答した学生が56%と大きな割合を占め、今年度を実施した一般的な4スキルの教科書を使った授業に対する評価はおおむね好評であったことがわかる。一方、「どちらとも言えない」の回答も比較的大きな割合（33%）を占めていることから、教科書の評価に対するより細かい分析を通して、教科書使用の限界にも目を向けて行く必要があるだろう。

次に、学習効果に関する満足度を質問Cで尋ねたが、「まあまあそう思う」「とてもそう思う」を合計した回答の割合が42%であり、教科書による学習効果には一定の成果があったことが認められる。

しかし、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらとも言えない」の回答を合計すると、その割合が58%と半数を上回り、教科書による学習効果にも限界があるのではないかという分析も成り立つだろう。なぜなら、学習効果に関する質問Cの性質上、「どちらとも言えない」という回答は、少なからず肯定的とは言えない要素が働いていると考えられるからである。その上で、58%という数字を見てみると、少なくとも対象学生については、学生が持つ英語に対する苦手意識を教科書だけで取り除く事は易しいことではないと言えるかもしれない。

次に、教科書における学習効果・意欲に関するより細かい分析を行うため、使用した教科書のメイン活動となるペアワークについての評価に限定した問いを設定して質問Dで尋ねた。その結果は「まあまあそう思う」「とてもそう思う」を合計した回答が77%となり、教科書のペアワークを楽しく行えたと感じた学生が大勢を占めた。このペアワーク活動の楽しさが質問Aと質問Bの回答で得た教科書への一定の評価の大きな要因になっているのではないかと考えたとしても、それほど恣意的すぎる考察ではないと思われる。特に対象としている保育科の学生はペアワークやグループワークといったコミュニケーション活動、インタラクティブ活動または主体的に体を動かすアクティブな活動を好み、積極的に取り組む傾向が強く見られる。授業でも、文法説明の時と比べ、発音やペアワークをしている時の方が楽しく取り組んでいる印象が強い。しかし、その一方で、「どちらとも言えない」の回答が33%を占めているという事実も無視する事はできない。コミュニケーションなどの活動を好む傾向を押し量れば、アクティブな活動をさらに工夫し、もっと多く展開することで、学生の好みやニーズにあった学習活動がさらに提供できる余地がまだまだあると言えよう。

教科書の評価に加え、今回の調査で重要なポイントの一つである保育現場で使える英語活動の評価を問うているのが質問Eである。それによると、「教科書」は3名とポイントがとても低い。それに比べて「歌」「英語ゲーム」「紙芝居制作」は高評価であった。教科書以外の活動内容の方が高評価であるという結果から言えることは、比較論ではあるが、教科書だけでは楽しく英語を学ぶことに限界があり、対象となった保育科の学生にとっては、保育現場で使える活動を通した方がより楽しく英語を学べたということであろう。自省的に言えば、教科書の使用方法に関する見直しも必要であると思われる。

そこで、それぞれの活動の学習効果を問う質問Fで各活動の比較をさらに試みた。それによると、回答の割合が高い方から「教科書」(32%)、「海外保育調べ」(23%)、「紙芝居」(16%)、「絵本」(10%)、「英語ゲーム」(9%)、「歌」(8%)、「保育指導案」(2%)となっており、質問Eでの結果と比較して考察すると、楽しかった活動と学習効果の高かった活動に乖離が見られることがわかった。ただし、学習効果では一見教科書が好評だと思われるが、教科書(一般的な英語能力を開発する活動:EGP)とその他の活動(保育に特化した英語能力を開発する活動:ESP)の2つに分けて比較してみるとEGP活動が32%、ESP活動が68%となり、学生のニーズと効果の両面でESP活動がEGP活動を大きく上回っていることがわかった。

さらに、質問GでEGP活動とESP活動の学習レベルの違いを問うことで、保育現場での英語活動が学生自身の学びに耐えうるものかを確認した。その結果を見ると、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」の合計が37%となり、「まあまあそう思う」「とてもそう思う」の合計18%と比べて、学

生は教科書とそのほかの活動の英語学習レベルにさほど違いは感じていなかったことがわかった。もっとも大きな割合を占めている「どちらとも言えない」(45%)をどう解釈するかが問題であるが、質問Gの性格上、あまり違いを感じていないのではないかという解釈が成り立つように思われる。この結果から保育活動を通した楽しい英語の授業でも学生の学びに充分耐えうると言ってよいだろう。

質問I、質問J、質問Lでは、卒業して保育現場へ出た時の早期英語教育に対する学生の意識を問い、それとともに、大学の英語の授業でのESP活動のニーズを尋ねた。それらの質問に対して、圧倒的に「まあまあそう思う」「とてもそう思う」と回答した学生が多かった。卒業して保育者として社会に出たときにすぐに使える実践的な英語学習の経験を大学の授業で提供することができれば、学生のニーズに大いに応えることになるだろう。

その他、自由記述の問い、特に質問Hと質問Mに対する学生たちの代表的な意見を見ると、動機づけ、学習意欲の向上、また学習効果の面でもESP活動において顕著な成果を収めていることが確認できる。同様に、「英語を使って楽しくゲームができると知り、英語をもっと学びたいと思った」「英語に対しての苦手意識があったが、様々な活動を通し初めて英語が楽しいと感じることができた」などの意見があり、英語活動の重要性、楽しさを学生たちが感じていることを窺い知ることができる。また、「英語を難しいと思わなくなった。自由に表現できる方法を学んだ」等、ESPアプローチによるアクティブでアクチュアルな活動を重視した授業を通して、苦手意識の軽減方法を学生自身が気づいたことを物語る記述も多く見られた。

5. まとめと課題

今回の調査結果により、対象学生たちの英語に対する苦手意識が全体的に高く、これまでと同じような伝統的でEGP寄りの授業を保育者養成校で行うだけでは苦手意識を取り除くことに限界があり、この苦手意識を軽減するためにはESPを取り入れたより実践的な英語活動の実施が大きなポイントになると結論づけることができる。学生が現場に出た際にすぐに実践的に使える英語活動を授業で取り入れて行くことが重要であり、保育科という専門科ならではの英語の授業を展開していかなければならない。

それにとどまらず、理想的には、保育現場で行う活動をできるだけ多く授業に取り入れることが重要だと筆者たちは考える。授業の中に実際の保育現場のような早期英語教育の活動そのものを導入することが、現在の保育科で学ぶ学生たちの英語学習の意欲を大きく高め、かつ英語運用能力の向上につながっていると考えられるからである。これは、現在の大学生の多くが小さい頃に自ら保育・幼児英語教育にあまり慣れ親しんでいないと考えられることもあり、仕事につながるより実践的な早期英語教育活動を取り入れた大学の授業を通して、子どもたち同様に、言語習得のプロセスを自然な形で追体験しながら学び、学生自身の英語学習にも大きな効果があることを示唆しているように思われる。

また、多様な活動を通して多角的に英語と保育を繋げていくための学びが必要であり、現場の保育内容により近く、考え抜かれたアクティビティを多く取り入れ、学生の興味を伸ばすことで学習意欲を持続させることはもちろん、学習効果にも細心の注意を払っていかねばならない。そのために

も、新しいESP活動の研究を取り入れながら、保育者養成校の学生にふさわしい内容、保育現場に出た際にも生きてくる教材を積極的に導入していく必要がある。そのように考えてくると、保育者養成校における英語教育のあり方の方向性としては、少なくとも当該科目の受講生に関して言えば、ESPに完全特化した授業を展開することが最善であると言えよう。もちろん、単純化することは危険であるが、仕事に直結する早期英語教育のノウハウを実践的に習得しながら、学生自身の英語運用能力に対する学習効果があるのであれば、ESP教育に完全特化した方向に授業をデザインすることに躊躇する必要はないように思える。いや、むしろ、その方向へ向かうことこそが保育科の英語教育のあり方において必要不可欠なことではないであろうか。学生の英語力にかかわらず、実施方法を工夫することによってESPに完全特化した授業こそ最大の効果が期待できるのである。そのためには、保育の他の専門科目と同じように、保育の現場経験があり、早期英語教育に精通している教員を担当者にすることが理想である。あるいはEGP教育の専門家と保育現場で早期英語教育の経験がある教員とのチームティーチングがそれに代わるものであろう。それを踏まえ、今後の大きな課題としては、授業に導入するESP活動の改善や新しい活動のさらなる導入、そして、ESP活動に完全特化した授業の実施とそれによる学生たちへの動機づけや学習効果の客観的調査などが考えられる。

上述したように、保育者養成校における英語教育のあり方の方向性を考えると、大学の保育科で行う英語教育の担当教員は、英語に精通しているだけでなく、保育現場にも精通していることが望ましい。また、コミュニケーション能力の高い教員であればなおのことよい。保育者とは多様な場面で職員同士の協力が求められ、また、子どもと楽しく日々の生活を送る能力が必要である。クラス内で英語を楽しく学ぶというのは保育者を目指す学生にとって向上心に繋がり、学生たちが言語習得の楽しさ重要さ充実さを感じることができるだろう。英語という科目には楽しく学ぶことが一番と言って良いほど重要であると考えられる。私たちが目指すべき保育者養成における英語教育は、より実践的なESP教育を通して、保育現場で早期英語教育に携わる次世代の保育者たちを育成するだけでなく、それと同時に、保育現場にも精通し、早期英語教育にも精通した教員を育成し、早期英語教育における学生と教員の好循環を生み出す試みでもあると考える。

参考文献

- 宇賀田克子ほか (2005). 「福岡県の保育所における音楽、英語および園芸の実施状況 (アンケート調査)」, 福岡女子短大紀要, 66, 17-27.
- 大須賀直子 (2006). 「保育者養成学校におけるESPアプローチの実践とその効果の検証」, 秋草学園短期大学紀要, 23, 1-14.
- 加茂葉子ほか (2013). 「保育者養成課程の学生に対する英語学習に関する追跡調査: ESP (English for Specific Purposes) アプローチの視点から」, 育英短期大学研究紀要, 30, 81-94.
- カレイラ松崎順子 (2008). 「ESPを取り入れた英語カリキュラム開発のための学生に対するニーズ調査-保育専攻と心理専攻の類似点および相違点-」, 東京未来大学紀, 1, 77-87.
- 小玉容子ほか (2014). 「短期大学における幼児・児童向け英語教育の実践: 教材研究と学びについて」, 鳥根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, 52, 187-194.
- 田中敬一 (2014). 「早期英語教育に関する学生の意識調査」, 八戸学院短期大学研究紀要, 39, 25-34.
- 田辺尚子 (2012). 「短期大学保育科におけるESPの視点を取り入れた授業実践」, 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要, 9, 105-120.

- Dörnyei, Zoltán (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. (ゾルタン・ドルニエイ著, 米山朝二・関昭典訳 (2005). 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』, 大修館書店).
- 深山晶子 (編) (2000). 『ESP の理論と実践』, 三修社.
- 法務省 (2017) 「在留外国人統計都道府県別 年齢・男女別 在留外国人 (総数)」
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files/data?fileid=000008051687&rcount=1>
- 望月健一 (2016). 「短期大学における目的別英語教育(1): 幼児教育学科『英語Ⅰ・Ⅱ』の授業計画と運営」, 富山短期大学紀要, 51, 86-113.
- 森田和子 (1995). 「保育科の英語教材として見る『保育現場』(Ⅰ)」, 横浜女子短期大学研究紀要, 10, 81-98.
- 森田和子 (1997). 「保育科の英語教材として見る『保育現場』(Ⅱ)」, 横浜女子短期大学研究紀要, 12, 35-54.
- 吉山みゆき (2009). 「デジタル・ストーリーの英語教育の実験」, 共栄学園短期大学研究紀要, 25, 197-206.